

■二葉亭四迷 小説家。ロシアへの危機感から政治志すも挫折, ロシア文学翻訳で名を成すも, 屈折した人生を送り続けた。

ふたばていしめい
禁門の変・・・1864＝

江戸市ヶ谷で、尾張藩下級武士長谷川吉数の長男・独り子に生まれる。母は静子。本名長谷川辰之助。

父母からは愛されず、親戚付き合いもほとんど無いなか、祖母に溺愛されて、我儘一杯に育つ。

明治維新・・・1868＝ 4歳：維新の動乱で、母・祖母とともに、名古屋に移る。

廃藩置県・・・1871＝ 7歳：尾張藩校に入学。
学問のすすめ1872＝ 8歳：退学し、上京。麹町区飯田町に住む。

明治6年政変 1873＝ 9歳：

初の民間工場1875＝11歳：父の転勤のため、松江に移り、
吉田松陰ら志士を尊敬、西郷隆盛を敬愛し、板垣退助らの自由民権派にも共感する反権力的傾向を持ち、

大久保暗殺・1878＝14歳：再び、上京。森川塾に入るも、退塾。_対ロシア外交への危機感から、陸軍士官学校受験するも、不合格。

_さらに挑戦し続け、都合3度失敗したのち、
明治14年政変1881＝17歳：_東京外国語学校露語科に入学。快活で茶目っけの多かった少年が“変わり者”に豹変。
新体詩抄・・・1882＝18歳：祖母が死去。最年長かつ抜群の成績で、級友の“兄貴分”として敬愛され、_亡命ロシア人教師の教えで、19世紀ロシア文学に目を開かれ、政治少年から“理性ある狂気”の文学青年となり、以後、激しく振幅、
岩倉具視没・1883＝19歳：専修学校に入学、
内閣発足・・・1885＝21歳：修了。猿楽町に転居。_首席を続けて将来を嘱望されるが、外国語学校が東京商業に併合されると、
帝国大学始・1886＝22歳：*退学。当時新文学の旗手と見られていた坪内逍遙をたずね、文学観を披瀝して逍遙に驚嘆され、その勧めで、ペリンスキイの「芸術の理念」を翻案し自らの到達点示す小論「小説総論」を発表、「カートコフ氏美術俗解」、バアヴロフの「学術と美術の差別」、ドブロリュウボフの「文学の本色と平民との関係」などを、抄訳発表。以後も、逍遙の推挽を受け、自らの人格・教養・能力全てを注ぎ込んで、
国民之友始・1887＝23歳：「浮雲」第1編を刊行。ロシア・ツルゲーネフの「父と子」を翻訳するも、なぜか刊行されず、
初の対等条約1888＝24歳：*「あひどき」「めぐりあひ」を翻訳刊行して感銘を与え、「浮雲」第2編も刊行するが、
帝国憲法発布1889＝25歳：「浮雲」第3編で、日本では“余計者”は敗北者でしかなく、ロシアのように“独立した人間”足り得ないことに行きついて、創作意欲を失う。生活のため、内閣官報局雇員となって海外の新聞・雑誌の翻訳に従事。苦痛と苦悶が連続するなか、下層社会へのヒューマニズムから“醜業婦”に魅かれて、悪所通いにも精を出し、

足尾鉋毒始・1891＝27歳：
郡司千島探検1893＝28歳：_親の反対を押し切って、おそらくその一人と結婚、
この間、哲学・宗教・科学を研究するも答を得られず、

日清戦争始・1894＝30歳：長女が誕生。
白馬会・・・1896＝32歳：離婚。金銭上の必要から、ゴーゴリの「肖像画」、ツルゲーネフの「アーシャ」を「片恋」として翻訳出版。
八幡製鉄始・1897＝33歳：同じく「ルージン」を「浮き草」として翻訳出版。局長交代で雰囲気が一変したため、辞職し、
子規句歌革新1898＝34歳：_新たに興味の対象となった実業と国際問題の職は得られず、陸軍大学校露語科教授嘱託となるも、持病の淋疾で退職、奔走の結果、海軍編修書記の職を得てまもなく、

Bushidou・・・1899＝35歳：_再興された東京外語語学校露語教授に迎えられ、
ビア/国産化・1900＝36歳：_早くも主任教授に推される。人格識見とも優れて多くの教え子から慕われるも、
田中正造直訴1901＝37歳：海軍大学校露語科教授嘱託。
教科書疑獄・1902＝38歳：_国際舞台での活動を念願して高等官の地位を捨て、大陸に渡り、ウラジオストクでエスペ란チスト協会に加入後、ハルビンに赴くも志を得ず、コレラの流行もあって北京に移動。外語語学校同窓の川島浪速から警務学堂の提調(事務長)を委嘱され、職務に没頭するも、万事手詰まりとなって自己嫌悪に陥り、

日比谷公園・1903＝39歳：_帰国するが、国際的視野は広まり、
日露戦争始・1904＝40歳：再婚。_日露戦争勃発とともに{大阪朝日新聞}に迎えられ、ロシアの新聞の翻訳・調査を担当、「満州実業案内」などで自衛戦争論を展開などするが、
日露戦争終・1905＝41歳：_報告文が精緻に過ぎてほとんどが没となり、仕事せずに高給取っていると社内で問題化、勇退の勧告を受けるも、{東京朝日}の池辺三山の尽力で和解、「結局如何」「露国革命党」「ひとりごと」「某政治家の”かぐや姫”評」などの雑文に力量を発揮、戦争の惨禍に衝撃を受け、戦勝後は反戦平和を希求するようになる一方、ロシアに関する記事も歓迎されなくなり、小説を書くように執拗に説得されて断りきれず、

_新聞小説「其面影」連載始める。エスペ란チストとして「世界語」などの著書もある。
満鉄発足・・・1906＝42歳：_自身の精神の遍歴を示す新聞小説「平凡」を連載、草稿では教育不要論とともれる過激な記述、
韓国反日暴動1907＝43歳：_帰国後の翻訳はこの年の「血笑記」まで15編に及び、創作に劣らぬ価値をもつ。談話筆記「露西亜文学断片」「私は懷疑派だ」「予が半生の懺悔」が発表されたところで、朝日新聞露都特派員になり、宿願の国際的活動を夢見て勇躍ペテルブルグに赴任するも、不眠症に陥り、風邪をひいたのが原因で肺炎から肺結核となり、
アヲキ` 創刊・1908＝44歳：*帰国の船中で、没した。

伊藤博文暗殺1909＝45歳：

多賀出版「明治の国際化を構築した人々」、「この人どんな人」、「没年日本史人物事典」、平凡社百科事典、山田風太郎「人間臨終図巻」、「目でみる日本人物百科」、インターネット、